

『エレミア書』とホプキンズの ソネット（177）

山田 泰 広

T. S. エリオット（Thomas Sterns Eliot, 1888-1965）は、長編詩『荒地』（“The Waste Land”）に付けた献辞でその詩の誕生に手を貸したエズラ・パウンド（Ezra Pound, 1885-1972）を「私より優れた言葉の匠」（il miglior fabbro）と呼んでいるが、詩人というものは本来ことばの匠でなければならない¹⁾。批評家・鑑賞者の視点を持ち、自分の書いた作品の表現を鑑賞する側への効果という観点で吟味しない詩人は詩人として怠惰である。意図した効果が達成できない作品は詩的表現としての欠陥があることを意味する。私たちが味わうべきは、作品の題材となっている思想や感情のリアリティというより、その表現の在りようが醸し出すものである。従って、作品の評価基準となる表現の的確さ、斬新さについては、思想の偉大さや感情への誠実さといった観点ではなくて、鑑賞する側への効果という観点から論じられるべきである。

そのことは G. M. ホプキンズの作品を論じる場合にも忘れてはいけない。ホプキンズ研究の落とし穴は彼の作品が「ことばの匠」の視点から鑑賞者（その中には当然詩人自身も含んでいる）への効果を計算しながら書かれたという事実を研究者が忘れてしまいがちなことである。今日、私たちは彼の作品原稿を目にすることができるが、その原稿にはおびただしい推敲の跡が認められる²⁾。推敲は語の置き換えから、句や文の書き換えにまで及ぶが、その変更は主に音声的効果を高めるためである。ホプキンズは詩を「スピーチの寵児」（darling child of speech）と見なして音声面での洗練を重んじたため、推敲においてとりわけ聞き手の視点での吟味が重視されたのである³⁾。

ところで、表現効果の問題を考える場合、もっと重要なのは1篇のスピーチ・テキストである詩作品における語の選択や言い回し、全体の構成がもたらす効果の問題である。ある話の内容を、ある語、ある言い回しを使い、観念をある文脈において一定の順序で示すことで、鑑賞者の内に、笑い、哀れみ、恐怖、驚きといった反応を掻き立ててその人を楽しませることが文学表現の本質的目的である⁴⁾。言い換えれば、表現内容と表現方法の関係の在り様、取り合わせが文学における効果の源泉である。あるものごとを叙述することはそのための便法である。叙述の内容が事実に関することかどうかは問題ではない。意図的に構築された表現に鑑賞者が反応して笑ったり、驚いたり、愉快になることが何より作品に求められる。思想を述べるのも同じ目的による。エリオットが17世紀の英詩の特徴として評価した「思想の感覚的表現」は、まさにその目的に沿うものである⁵⁾。ダンやマーベルら形而上詩人たちは、読者を驚かすために奇想と呼ばれる感覚的比喩を使って思想を述べているからである。

19世紀ビクトリア朝英国でイエズス会員として教会や大学に奉職したホプキンズの場合も例外ではない。詩人が詩を書く第一の目的はことばで自らを楽しませることである。深い憂鬱の中に落ち込んだ魂の叫びである「テリブル・ソネツ」(*terrible sonnets*)に「楽しませる」ということばは似合わないように思われるだろうが、苦渋に満ちた精神的経験を述べた表現も、耳を介した響きで私たちの心を動かし、言い回しや着想の斬新さ、展開の意外さで私たちを驚かす、そういう文学的経験を「楽しみ」と言うのである⁶⁾。

本稿では、ホプキンズ晩年のソネット“Thou art indeed just”(OED 177)を旧約聖書『エレミア書』(*The Book of Jeremiah*)12章を本歌とするパロディー的作品と見なすことでその味わいがはっきりわかるという観点からその表現について考察したい⁷⁾。

1889年3月17日の日付が入った、“Thou art indeed just”で始まるG. M. ホプキンズのソネットの原稿(Plate 516)にはラテン語による旧約聖書エ

レミア書の一節 (xii, 1) が手書きで書かれている。アンダー・ラインが引かれたラテン語の該当部分は以下のとおりである。

Justus quidem tu es, Domine, si disputem tecum: verumtamen justa loquar ad te:
Quare via impiorum prosperatur? etc⁸⁾ .

1611年に完成した欽定訳聖書 (King James Version) では次のように訳されている。

Righteous art thou, O Lord, when I plead with thee: yet let me talk with thee of thy judgments: Wherefore doth the way of the wicked prosper?⁹⁾

ラテン語のテキストにできるだけ忠実に英訳すると以下のようになる。

Thou art indeed just, Lord, if I dispute with thee: yet what I say to thee is just: Why does the way of the impious prosper?¹⁰⁾

ホプキンスはこの一節をほぼそのままソネットの冒頭の3行で使っている。

Thou art indeed just, Lord, if I contend
With thee; but, sir, so what I plead is just.
Why do sinners' ways prosper?

dispute の起源である disputem に contend, verumtamen に but, say の意味である loquar に plead を, impious way の意味である via impiorum に sinners' ways を当てているが, 表現内容はほぼそのままである。ただ, ラテン語に忠実な英語訳の dispute を contend に, say を plead に換えることで, 'indeed' 'Lord' 'contend' 'plead' と語尾に重々しい響きの子音 d が 4 つの強勢ある音節で現れ, 厳粛な印象を強めている。

引用部分は, 神の摂理, 神の公正さを信頼しつつも, その信頼をあざ笑うかのような世の中のありように苛立っている話者が, 神に向かって, 自分が不平を述べるにはそれだけの理由があると述べて, その申し立ての正

当性を主張している内容である。ホプキンズが『エレミア書』の表現内容をそのままに、表現形式においてもラテン語訳に忠実に英語訳しているのは、エレミアと自分の弁論の動機が似ていて、エレミアの弁論の冒頭部分は神に向かって不服を申し立てる時のスタイルとしてふさわしいと考えたからであろう。

エレミア書に不案内な読者は、ラテン語の一節がなければ作品の冒頭の部分がエレミアのことばを元に行っていることなどまったく気が付かず、ホプキンズが思いついた表現と見なすだろう。ラテン語の2行と出典の明示によって、読者はこの作品を読むには『エレミア書』の12章1節を念頭におく必要がある、という示唆を得ることになる。一般に、エピグラフの役割はそのようなもので、それを念頭におかずに読んでしまっただけでは作品のねらいは不明瞭になる。エピグラフは読者にこれから読み始めるテキストへの「かまえ」、心理的準備を促す役割をする。読者はエピグラフの形式と内容をテキストの形式と内容に重ねながら作品を味わうように求められている。ホプキンズの手稿を見ると、『エレミア書』のラテン語訳に下線が引かれ、2行目の終わりに「以下省略」を意味する *etc* の記号があり、出典を示す '*Jerem. xii 1*' の注意書きがある。このことは、この一節、とくに12章1節がテキストを理解するのに欠かせないということを示唆している。エピグラフ（らしきもの）の使用はホプキンズの他の作品では見られない特徴となっていて、見過ごすことはできない。

エピグラフが暗示しているのは、1つには、このソネットが神に話しかける形式の弁論という枠組をもっているということである。次に、この話者は、エレミアと同じように、世の中のありように不満をもっていて、そのことを黙っておれなくなって神に不満をぶつけていること。さらに、その不満の正当性を主張していることである。以上の点において、ソネットの話者はエレミアその人といってもいい。

しかしながら、「私」がその後で申し立てることは同じではない。ソネットの続く部分は、『エレミア書』にはない部分である。『エレミア書』ではこう続いている。

bene est omnibus qui praevaricantur et inique agunt¹¹⁾

wherefore are all they happy that deal very treacherously?¹²⁾

これに対して、ソネットはこうなる。

and why must
Disappointment all I endeavour end?

『エレミア書』では、前の部分の内容を受けて、道徳的な罪を犯して不正な行いをする人々が恵まれた状況にあるという問題について述べているが、ソネットでは、そのような人々と対照的な自分の行いの結果に焦点を当ててゆく。不実な連中の行いはよい成果を産み、神に仕える自分は真剣な努力をしてもいつも期待はずれで終わってしまう、という状況の不合理について黙っていることができなくなり、「私」は神に不服の申し立てをする。神の掟に照らして、それに反する人々が恵まれた生活を送っているのに、忠実であろうと努力している自分が挫折を繰り返すのは納得できないという思いの告白である。3行目行末の‘must’では、強い口調に不満の強いエネルギーが込められる。上の引用部分では、all my doings end in disappointment というべきところを‘Disappointment’が主語、‘all I endeavour’が他動詞‘end’の目的語になっていて、とげとげしい感じの言い回しになっている。Disappointmentという語は行の冒頭にあって、そこは本来、弱強格(iambus)の詩脚で始まる位置なのだが、その語がそこにあるため強弱格(trochee)の詩脚が2つ続きリズムが変わる。リズム的にも印象に残る語である。ソネットの話者は、世の中のありようもさることながら、自分の人生の宿命のありようにいっそういらだちを抑えられないのである。

一方、『エレミア書』では、エレミアの不満が度重なる挫折にあるとは書かれていない。

et tu Domine nosti me vidisti me et probasti cor meum tecum¹³⁾

But thou, O Lord, knowest me: thou hast seen me and tried mine heart toward thee¹⁴⁾

2つのテキストはこの部分から明確な差異を見せ始める。ソネットの「私」は預言者エレミアの模倣から始めて、自分自身のことを中心に話し始めるのである。

ソネットの5行目～7行目は4行目で述べられた個人的問題（挫折）についての心情を引きずってゆく部分である。

Wert thou my enemy, O thou my friend,
How wouldst thou worse, I wonder, than thou dost
Defeat, thwart me?

「敵」であったとしてもそんなひどいことをするだろうか、と、「友」である自分の計画を次々と挫く、非情な仕打ちへの不満を「私」は相手を激しく責めるような調子で神にぶつける。「I wonder」という句が挿入されているのは、語り口を自問するような調子にするため、それによって問い詰めるような強い調子が和らげられる。そんなところにも「私」の神に対する態度、「私」の立場が反映されていて興味深い。しかしながら、同時に‘Defeat’, ‘thwart」と同義語を続けることで神の仕打ちの執拗さを強調してもいる。

その後続く部分（7-9行目）は、3行目の問題（罪人たちの成功）を自分の生活との対照において述べる。

Oh, the sots and thralls of lust
Do in spare hours more thrive than I that spend,
Sir, life upon thy cause.

「のんだくれ」「肉欲の奴隷」は「罪人」のうちの具体的なグループである。この人々は人生を神のために捧げている自分より、暇な時間にうまくやっている、と「私」は訴える。その現実を神に告げて、心に留めておいてほ

しいという願いからである。

9行目～12行目では、悲哀を誘う叙述は一旦消えて、高揚した気分で冬の眠りから目覚めた春の自然界の事象について述べる。

See, banks and brakes

Now, leaved how thick! laced they are again
With fretty chervil, look, and fresh wind shakes
Them; birds build—

この作品が書かれたのは3月17日で実際早春であったが、それはともかく、今、自然界には春が来て、植物は冬の眠りから目覚めて豊かに葉を茂らせ、春風にそよぎ、鳥たちは巣を作り、子育ての準備を始めている¹⁵⁾。つまり、冬は終わり、大地では生命あるものが再び活発に活動を始めている。‘See’ と ‘look’ の挿入は、神を間近に意識し、神の注意を引くためである。自然界は神の創造されたとおりに動いている。喜びをもって、そのことを神に伝える口調は快活に聞こえる。

しかし、その快活さは12行目の途中で消えて、再び悲哀を誘う叙述になる。

but not I build; no but strain,

Time’s eunuch, and not breed one work that wakes,

自然界の事象についての叙述は結果的にそれと対照的な自分の現実の哀れさを強調するためのレトリックとなる。「私」は力を振り絞るが何もできてこない。「時の宦官」(Time’s eunuch) という表現は自嘲的である。宦官は生殖能力をもっていない。人生において価値のあるもの (one work that wakes) を作り出せない自分を否定的な意味で宦官に喩えているのだから。聖職者が自分を否定的な意味で生殖能力のない宦官だと蔑むのは、読者には驚くべき表現であり、悲哀を誘うユーモアと感じられる。そのようなことば遣いで自分に冷笑的態度を示すことで、話者は実は無意識に神の責任を問い、哀れみを求めているのである。

さて、ホプキンズのソネットは次のような祈願で終わっている。

Mine, O thou lord of life, send my roots rain.

この1行は弁論の結論に当たる部分である。腹を立て、神を責めるような調子で始まった弁論も、最後は弱気な調子になって、神の慈悲にすがる哀訴で終る。神がここで語り手が「いのちの源である神」に求める「雨」とは、いのちを再生させる神の慈愛である。春の雨が涸いた大地を潤して、根元まで染み透り、その精気が花を咲かせるように、いまだわびしい冬の中にいて「宦官」と自らを自嘲するしかない自分にも魂の渇きを癒してその精気を甦らせる神の慈愛が必要だと「私」は「いのちの主」(lord of life)である神に訴えているのである¹⁶⁾。

ここで「私の根」(my roots)と呼ばれているものは、いのちの根源であり、いのちの花を咲かせ、ものを作り出す生命力の宿るところである。あるいは、それは自分の存在の奥深く根付いているもので、靈魂のようなものを想像してもよい。17世紀の宗教詩人たち、例えばハーバート(George Herbert, 1593-1633)やヴォーン(Henry Vaughan, 1622-95)は魂の再生を自然界の事象である春の到来による植物の芽吹き、朝の到来による目覚めに喩えて感覚的になまなましく表現したが、とくにハーバートは‘The Flower’という作品で、失意の時期には、心は冬にしぼむ花のように、地上部分は枯れ、地中の根だけで生きつづけていたと述べていて、ホプキンズの着想に影響を与えたかもしれない¹⁷⁾。

ただ、同じ作品でハーバートは、自分の心に戻ってきた神を「力の源である主」(Lord of power)と呼んで、万物の生死を意のままにできる力をもつ神を称えているが、ホプキンズは「いのちの源である主」と呼んで、生命力に対する渴望の意識が強いことを暗示している。どちらの作品も魂の問題をテーマとしているが、ハーバートが信仰のよみがえりを経験した人を語り手としているのに対して、ホプキンズの語り手は自らを、水を求めている哀れな植物に喩え、いまだ失意の時期が続く中で、魂に春が到来するのを渴望している。その点が大きな違いである。

このソネットは冒頭で『エレミア書』12章の預言者エレミアの弁論をそのまま英語にして借用していて、神に向かって自分の主張の正当性を申し立てる点は同じであるが、最後に神に何を求めるかは大きく違っている。神を欺く者が栄えている現実への不満を述べた後でエレミアが求めたものは、罪人に対する神の厳しい裁きである。

*congrega eos quasi gregem ad victimam et sanctifica eos in die occisionis*¹⁸⁾

*pull them out like sheep for the slaughter, and prepare them for the day of slaughter*¹⁹⁾

これに対して、ホプキンズの祈りは、達成の喜び、創造の喜びから見放されたような人生の中でなんとか神の慈悲にすがろうとするものである。彼がこの弁論形式の詩のゴールをそのようなものにしたのは、彼の第一の関心が「世の在りよう」ではなく、「自分の人生の在りよう」にあったことを示唆している。彼には何より、「生命感情のよみがえり」が必要であったのだ。そのために、神が関心を示して、助けてやろうという深い思いやり (compassion) の心をもたれるように、話者の弁論は主に自分の哀れさ、救いのなさを訴える内容になっているのである。

このように、ホプキンズのソネットは、最初に『エレミア書』の一節をこだまさせることで読者にエレミアの弁論のような内容の展開を予想させるが、その後の展開はそれを裏切って行く。すなわち、読者は世にはびこる道徳的悪人に対してソネットの話者が神の厳しい措置を求める預言者エレミア風の攻撃的な祈りをするものと予想するが、それはなく、聞えてくるのは挫折ばかりを自分に経験させる神をなじる嘆きと神の同情にすがろうとする、切ない自己救済の祈りなのである。また、エレミアは神を 'Domine' (Lord) とだけ呼んでいるが、ソネットの話者の方は、最初は 'Lord' 'sir' だが、次に 'my friend' 'Sir', 最後に 'Mine' 'lord of life' と呼び、「いのちの源」である神を自分との関係で強く意識している。一貫して態度、調子が変わらない『エレミア書』と異なり、その態度、調子の変化がこの作品における悲哀の味わいをいっそう深いものにする。そ

れがこの作品の核となる面白さであり、その効果はそれが下敷きとしたもう一つのテキストの内容を念頭におくことでその特徴が際立ってくる。『エレミア書』と ‘Thou art indeed just, Lord’ との関係はそういうものである。

注

- 1) Eliot, T. S., *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* (London: Faber and Faber, 1969), p. 59.
- 2) MacKenzie, Norman E (ed.), *The Later Poetic Manuscripts Of Gerard Manley Hopkins* (New York and London: Garland Publishing, Inc., 1991)
- 3) Roberts, Gerard (ed.), *Hopkins Selected Prose* (Oxford: Oxford University Press, 1980), p. 137.
- 4) Eliot, *Selected Essays* (London: Faber and Faber, 1969) pp. 300-301. p. 284 など参照。詩における「驚きの要素」(element of surprise) や「恐怖の効果」(effect of fear) がポーを引合いにして、作品において重要なものと言及されている。
- 5) Eliot, *Selected Essays* p. 286.
- 6) Eliot, *Selected Essays* p. 305. エリオットは「詩を精読する唯一の理由は楽しいからだ」と述べている。
- 7) (OED 177) とは、MacKenzie (ed.) *The Poetical Works of Gerard Manley Hopkins* (Oxford: Oxford University Press, 1990) における作品番号である。
- 8) MacKenzie, (ed.), *The Later Poetic Manuscripts* p. 340, 342, 343.
- 9) *Holy Bible: King James Version* (New York: American Bible Society, 1973) p. 686. ‘Jeremiah,’ 12, 3.
- 10) Milward, Peter, *A Commentary on the Sonnets of G. M. Hopkins* (Loyola Press, Chicago, 1969) p. 183.
- 11) *Biblia Sacra: Inuxta Vulgatam Versionem* (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1969) p. 1183. ‘Hieremias Propheta,’ 12, 1.
- 12) *Holy Bible: King James Version* (New York: American Bible Society, 1973) p. 686. ‘Jeremiah,’ 12, 1.
- 13) *Biblia Sacra: Inuxta Vulgatam Versionem* p. 1183. ‘Hieremias Propheta,’ 12, 3.
- 14) *Holy Bible: King James Version* p. 686. ‘Jeremiah,’ 12, 3.
- 15) MacKenzie, (ed.), *The Later Poetic Manuscripts* p. 343. 収録の原稿に書いた日付が入っている。
- 16) Chaucer, Jeffrey, *The Canterbury Tales* (The Prologue) ll.1-4.
- 17) Herbert, George, ‘The Flower’ ll.7-13.
- 18) *Biblia Sacra: Inuxta Vulgatam Versionem*. 1183. ‘Hieremias Propheta,’ 12, 3.

19) *Holy Bible: King James Version* p. 686. 'Jeremiah,' 12, 3.